

FUKUOKA PRIZE's Geographical Scope



福岡アジア文化賞の対象地域

東アジア、東南アジア
および南アジア地域

アジアの文化の価値を認識し、その文化を守り育てるとともに、
アジアの人々が相互に学び合いながら、幅広く交流する基盤をつくることに
貢献することを目的としています。

大賞 | 賞金500万円

アジアの固有かつ多様な文化の保存と創造に貢献し、その国際性、普遍性、大衆性、独創性などにより、世界に対して
アジアの文化の意義を示した個人又は団体を、学術研究又は芸術・文化の分野から選び、顕彰する。

学術研究賞 | 賞金300万円

アジアを対象とした学術研究における優れた成果により、アジアの理解に貢献するとともに、今後さらに活躍が
期待される個人又は団体を選び、顕彰する。

芸術・文化賞 | 賞金300万円

アジアの固有かつ多様な芸術・文化の育成又は発展に貢献するとともに、今後さらに活躍が期待される個人又は
団体を選び、顕彰する。

◆受賞候補者の推薦について

福岡アジア文化賞は、有識者のみなさまのご推薦により選考を行っています。国内
外の大学、芸術文化団体、報道機関等に所属する有識者の皆様におかれましては、
受賞候補者にふさわしいと思われる方の推薦にご協力をお願い申し上げます。

受賞候補者
推薦ページ



発行／2026年1月 福岡アジア文化賞委員会事務局

〒810-8620 福岡市中央区天神1-8-1 福岡市総務企画局国際部内
TEL 092-711-4930 FAX 092-735-4130
E-mail: f.prize@io.ocn.ne.jp HP: <https://fukuoka-prize.org/>



第35回 福岡アジア文化賞

FUKUOKA PRIZE 2025



大賞

琉球大学名誉教授
高良 倉吉



学術研究賞

延世大学名誉教授
白 永 瑞(ペク・ヨンソン)



芸術・文化賞

VTN アーキテクト主宰
ヴォ・チョン・ギア

[主 催] 福岡市、(公財)福岡よかトピア国際交流財団
[後 援] 外務省、文化庁

事業報告書

福岡アジア文化賞とは

アジアの学術研究や芸術・文化の分野で
顕著な業績をあげた個人や団体を顕彰する国際賞です。

福岡は、古くから日本の窓口として、アジア諸地域との交流において重要な役割を担ってきました。このような福岡の特性を踏まえて、アジア地域の優れた文化の振興と相互理解および平和に貢献するため、1990年に市、学界、民間が一体となって「福岡アジア文化賞」を創設しました。私たちは、これからもこの賞を通じて、市民の皆様とともに、アジアの学術・芸術・文化に貢献した人々に敬意を表し、アジアの固有で多様な文化の価値を、都市の視点で広く世界に伝えていきたいと考えています。



CONTENTS

第35回 福岡アジア文化賞受賞者	4-5
授賞式レポート	6-7
大賞 高良倉吉	8-9
学術研究賞 白永瑞(ベク・ヨンソ)	10-11
芸術・文化賞 ヴォ・チョン・ギア	12-13
歴代受賞者学術交流／特別企画	14-15
歴代受賞者名鑑	16-22
運営組織	23

第35回 福岡アジア文化賞受賞者



大賞

高良 倉吉

歴史学
琉球大学名誉教授



受賞者ページ

贈賞理由

高良倉吉氏は、琉球史研究の多方面に新境地を開いてきた歴史家であり、首里城正殿復元にも傑出した貢献を行うなど、歴史の表現者、プロデューサーでもある。綿密な資料分析、グローバルな視座による歴史観、卓越した行動力、分野を超えた企画立案のすべてを統合し、琉球史学を、学術研究から現代における実践の場へと広げている。

主な経歴・受賞歴

- 1947 沖縄県伊是名島生まれ
- 1988～94 沖縄県浦添市立図書館館長
- 1992 九州大学博士号(文学)
- 2004 国際交流基金 国際交流奨励賞・日本研究賞
- 2013～ 琉球大学名誉教授
- 2019～ 内閣府沖縄総合事務局「首里城復元に向けた技術検討委員会」委員長

主な著作

『琉球の時代:大いなる歴史像を求めて』筑摩書房(1980)
『アジアのなかの琉球王国』吉川弘文館(1998)

活動実績

左:首里城 守礼門の前にて ※一般財団法人沖縄美ら島財団 提供 右:史跡巡見で碑文を解説(琉球王家の墓、玉御殿)



TAKARA Kurayoshi



学術研究賞

白 永 瑞 (ベク・ヨンソ)

歴史学
延世大学名誉教授



受賞者ページ

贈賞理由

白永瑞氏は、韓国を代表する中国現代史研究者であり、国境を横断して、民衆や市民が生活する「核心現場」の視点から東アジアを考察する思想家として、社会科学・人文科学における指導的な役割を担ってきた。東アジア人としての白氏の思想的営為は、現代世界の困難な諸問題に取り組むための重要な指針を示している。

主な経歴・受賞歴

- 1953 韓国、仁川生まれ
- 1993 ソウル大学校大学院博士号(文学)
- 1994～2018 延世大学校史学科副教授、教授
- 2006～2016 季刊『創作と批評』主幹
- 2018～ 延世大学校名誉教授
- 2025 庸齋学術賞(庸齋賞運営委員会主管)

主な著作

『共生への道と核心現場:実践課題としての東アジア』法政大学出版局(2016)

活動実績

左:庸齋学術賞 授賞式にて 右:北京大学での講義風景



BAIK Young-seo



芸術・文化賞

ヴォ・チョン・ギア

建築
VTN アーキテクト
主宰



受賞者ページ

贈賞理由

ヴォ・チョン・ギア氏は、東南アジアの伝統と現代の建築技術を融合し、地域の環境や植生に配慮した建築デザイン、竹や木を材料として扱う構造デザインなど、数多くの斬新な提案を実践している建築家である。急速に発展するベトナムの都市課題を解決する建築のあり方を追究し、環境に優しいエコロジカルな建築の姿を、説得力を持って提示している。

主な経歴・受賞歴

- 1976 ベトナム、クアンビン省生まれ
- 1996 日本政府文部科学省奨学金を得て来日
- 2004 東京大学修士号(工学)建築家・内藤廣氏に師事
修士論文が古市公威賞(修士論文最優秀賞)、東京大学総長賞を受賞
- 2006 ベトナム、ホーチミン市に自身の建築設計事務所「ヴォ・チョン・ギア・アーキテクト」設立
- 2022 早稲田大学博士号(建築学)

プリンスクラウド賞、ARCASIAの6度のゴールドメダルなど数多くの国際賞を受賞。

活動実績



Wind and Water Café ©Dinh Thu Thuy



Farming Kindergarten ©Hiroyuki Oki

左図:Wind and Water Café
泥に浸したり燻製にしたりするといった伝統的な竹の処理により、建築材料として優れた特性を示している。

右図:Farming Kindergarten
工場労働者の子どもたちを対象とする幼稚園。連続した屋上公園として設計され、子どもたちに農業体験・野菜、そして屋外の広大な遊び場を提供している。

VO Trong Nghia

授賞式レポート 2025.09.16 開催



歴代受賞者を紹介するオープニング映像、司会の仲間由紀恵さんによる開会宣言とともに、華々しく幕を開けた第35回福岡アジア文化賞授賞式。秋篠宮皇嗣同妃両殿下ご臨席のもと、大賞の高良倉吉氏、学研究賞のベク・ヨンソ氏、芸術・文化賞のヴォ・チョン・ギア氏と各界関係者、市民の皆さんが一同に介し、式がスタートしました。

主催者を代表して高島宗一郎福岡市長が挨拶し、アジア地域の多様な文化と価値を広く伝える本賞の重要性と受賞者へ心からの祝意を述べ、続いて秋篠宮皇嗣殿下より、お祝いのお言葉を賜りました。

審査委員長を務める石橋達朗九州大学総長による選考経過報告の後、高島市長と谷川浩道福岡よかトピア国際交流財団理事長より、賞状とメダルが授与されました。

福岡市立千早西小学校6年生の代表児童から花束が手渡されると、会場には万雷の拍手が鳴り響き、祝福ムードは最高潮を迎えます。

受賞スピーチでは、それぞれの想いや喜びの声が伝えられ、続くインタビューでは、研究や活動の歩みや思い、今後の抱負が語られました。受賞者のウィットに富んだ話に会場からは時折笑い声が聞こえ、和やかな雰囲気になっていました。

フィナーレでは、全国トップクラスの実力を誇る精華女子高等学校吹奏楽部の皆さんが登場。笑顔とエネルギー溢れるパフォーマンスとミュージカル仕立ての演出で観客を魅了し、会場は一体となり盛り上がります。華やかな演奏とともに盛大な拍手が受賞者に贈られ、式は締めくくられました。



秋篠宮皇嗣殿下お言葉

本日、「第35回福岡アジア文化賞」授賞式が開催されるにあたり、大賞を受賞される高良倉吉（たから くらよし）氏、学研究賞を受賞される白永瑞（ベク・ヨンソ）氏、そして芸術・文化賞を受賞されるヴォ・チョン・ギア氏に心からお祝いを申し上げます。そして本日ご出席の皆様と共に、受賞者それぞれの活動や研究の一端について、この会場でお話を伺うことができますことを誠に嬉しく思います。

「福岡アジア文化賞」は、アジア各地で受け継がれている多様な文化を尊重し、その保存と継承に貢献するとともに、新たな文化・芸術の創造、そしてアジアに関わる学術研究

に寄与することを目的として、それらに功績のあった方々を顕彰するために1990年に創設されました。爾来、アジアの文化とその価値を世界に示すにあたり、本賞の果たしてきた役割には誠に大きなものがあります。

私自身、日本国内を旅するとともに、東南アジアを中心に、いくつかのアジアの国々を訪れました。そして、多様な風土や自然環境によって創り出され、長い期間にわたって育まれてきた各地固有の歴史や言語、民俗、芸術など、文化の豊かさと深さに関心を抱いてきました。

それとともに、貴重な有形・無形の文化を記録・保存・継承し、さらに発展させていくことの大切さや、新たに創造していくことによる広がり、そして、アジアを深く理解するための

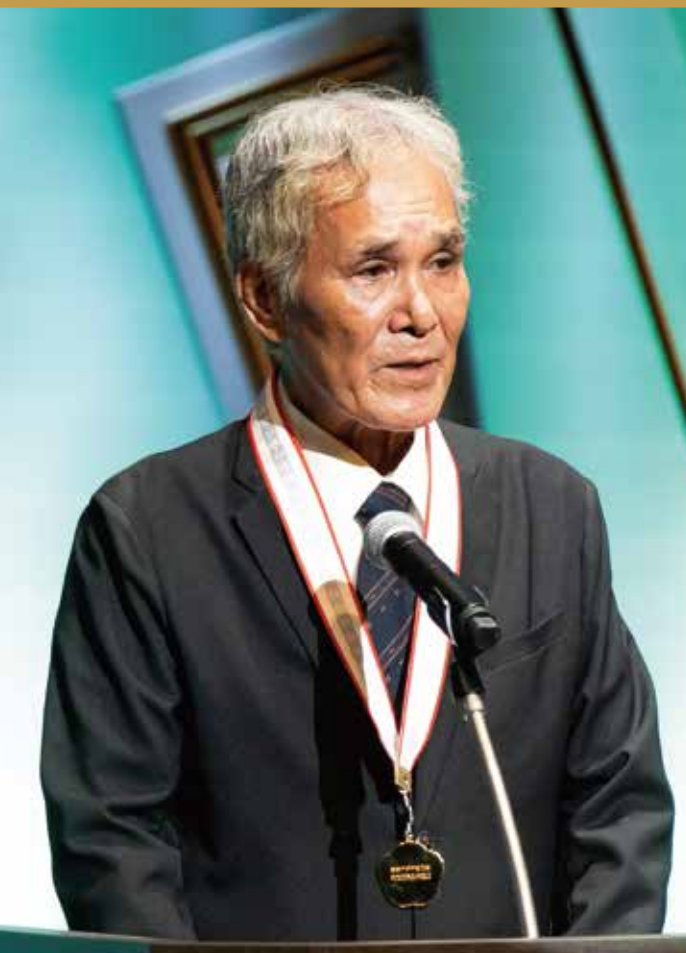
学術の重要性を強く感じてまいりました。このことから、本賞がアジアの文化・芸術の価値、ならびに学術面における成果を伝えていくことは、大変意義深いことと考えます。

その意味において、本日受賞される3名の方々の優れた業績とその意義が、アジアのみならず広く世界に向けて発信されることを願います。そして、国際社会全体でそれらを共有することは、人類の貴重な財産の蓄積につながると思います。

おわりに、受賞される皆様に改めてお祝いの意を表しますとともに、この「福岡アジア文化賞」を通じて、アジアに対する理解、そして国際社会の平和と友好が促進されることを祈念し、授賞式に寄せる言葉といたします。



大賞 高良 倉吉 歴史学者、琉球大学名誉教授



◆ 受賞コメント

今日、この場に居て、福岡アジア文化賞を戴くことになるとは、夢にも思いませんでした。選考の任に当たられた皆さんに、深く感謝申し上げます。

沖縄は、亜熱帯の豊かな自然に恵まれているだけではなく、悲惨な戦争を体験し、そして、困難な基地問題を抱える地域として語られています。そのイメージに加えて、沖縄には、450年に及ぶ「琉球王国」の歴史が横たわっていると、私は力説してきました。アジアの国々と活発に交流し、独自の文化を形成したことを、再認識すべきだと訴えてきました。

「琉球王国」の象徴が首里城です。戦争で失われた首里城を、多くの専門家や技術者、職人たちと力を合わせ、その復元に取り組んできました。過去のためではなく、未来の沖縄のために、首里城は不可欠な存在だ、と確信したからです。

ありがとうございます。今回の受賞を励みにしたいと思います。

授賞式インタビュー

インタビューでは、首里城正殿復元までの道のりを振り返りました。当初は史料が極端に少なく、琉球王国時代の姿を忠実に再現することは困難だったと言います。しかし、調査を続ける中で、玉座「御差床（うさすか）」の詳細な図面を発見し、関係者一同で万歳して喜んだというエピソードで会場を沸かせました。また、漆喰などの技術を持つ職人が沖縄にいたことも、復元を後押しした奇跡だったと語ります。

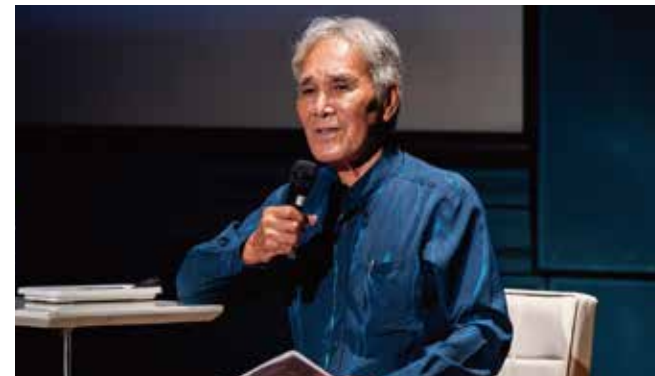
高良氏は、首里城全体の復元にはあと10年にかかる、体力の続く限りこの取り組みを続け、人生の全てを首里城に捧げたいと、強い決意を述べました。

◆ 市民フォーラム 大賞

「蘇る首里城正殿ーノートルダム大聖堂との比較の視点から」

日時／2025年9月17日(水)18:30～20:30
会場／アクロス福岡 円形ホール

第1部 基調講演



琉球史を長年研究し、2度にわたる首里城の復元では中心的役割を果たしてきた高良氏。基調講演では、首里城の歴史と復元のプロセスについて語りました。

琉球王国の王宮であった首里城は、1945年の沖縄戦で焼失し、30年以上かけて2019年2月に復元が完了しました。史料がほとんど残っていなかったため、「絶望的な状況でスタートした」と高良氏。徹底的にリサーチを重ね、さまざまな専門家が集結したことで復元が実現しました。

しかし、同年10月に火災で再び焼失。現在は防災・防火機能を備えた首里城正殿を再建中で、2026年秋の完成を目指しています。高良氏は「琉球王国時代の上に現在の沖縄がある。沖縄を訪れる人や地元の若者に、首里城を通して琉球の歴史を感じてほしい」と訴えました。



第2部 クロストーク



クロストーク登壇
河野俊行(九州大学高等研究院・特別主幹教授、国際イコモス名誉会長)

国際イコモス名誉会長の河野氏を迎えて、2019年の火災で甚大な被害を受けた首里城正殿とパリのノートルダム大聖堂を比較しながら、文化遺産の保護について話を展開しました。冒頭、河野氏はノートルダム大聖堂の歴史や建築を紹介。高良氏は、琉球は東南アジアと中国を結ぶ中継貿易で栄え、首里城が交流と文化発信の拠点であったと説明。島津の侵入後も外交術で独自の立場を保ったことから、大国の狭間で小国が生き抜く知恵が今にも通じると語りました。

続いて、高良氏が首里城復元の詳しい技法や材料、河野氏がノートルダム大聖堂の火災や復元の状況などについて説明しました。復元へのプロセスについて、首里城は国営公園の中にあるため国が主導し、県と連携して復元整備に取り組んでいること、現役宗教施設であるノートルダムはカトリック教会との関係に触れながら政府も関与して進められたことを解説。復元の技術に関しては、首里城は日本各地から宮大工に来てもらい沖縄の大工も技術を学びながら作業にあたった一方、フランスでは大工の技術が中世から脈々と受け継がれており、文化財保存の基礎にもなっていると話しました。

また、文化財は単なる建物ではなく、儀礼や祈りを含む「生きた文化」であり、文化財復元はどの時点の姿に戻すかが重要と強調しました。

寄付や関係者の尽力により、ノートルダムは2024年に復元され、首里城正殿は2026年秋に再び姿を現す予定です。河野氏は「現地に足を運び、今日の話を実感してほしい」と呼びかけ、対談を締めくくりました。



河野俊行氏

学校訪問レポート

開催日／2025年9月17日(水) 会場／福岡市立原中央中学校

修学旅行で沖縄を訪問予定の2年生に向けて「首里城復元と沖縄戦の記憶継承」をテーマに講演。高良氏は、米国統治下の沖縄でパスポートなしでは本土に行けなかった経験から、琉球史研究の道に進んだ経緯を話し、生徒からは驚きの声が上がりました。

続いてスライドを用いながら、琉球王国がかつてアジアの海上交易で栄え、多様な文化を取り入れてきた歴史を解説。その象徴である首里城が、沖縄戦で徹底的に破壊された経緯も説明されました。「沖縄戦ではおよそ20万人が犠牲となり、沖縄県民の4人に1人が命を落とした」と悲劇に触れつつも、「悲しみは消えないが、失ったものを取り戻すことはできる」と

力強く語る姿が印象的でした。さらに、2019年の火災で首里城が再び焼失した際の絶望と、現在の復元プロジェクトが多くの特設家や若者によって支えられている現状についても言及しました。

最後に高良氏は、沖縄が歴史の傷を負いながらも立ち上がってきたことに触れ、「今日の学びを出発点に、沖縄で実際に見て、聴いて、感じて、自分の言葉で平和について考えてほしい」と、生徒たちに温かいメッセージを送りました。修学旅行を前に、生徒たちが主体的に学ぶ姿勢を育む、非常に有意義な時間となりました。



学術研究賞 白永瑞 (ペク・ヨンソ) 延世大学名誉教授



◆ 受賞コメント

1990年代初頭以来、三十余年にわたり、東アジア全体を視野に収め、諸国家と社会を「変化する歴史」の中で相対化し、それがいかに相互に連動してきたかを説明する枠組みを模索してまいりました。東アジアをひとつの単位とした歴史的感受性と認識を広げていく過程において、和解と平和の東アジアが生成されることを期待してきたからです。その道を歩む中で、東アジアの知識人との交流と連帯に力を尽くしてまいりました。

いま私たちは複合的な危機に直面する、不安定性の時代のただなかにあります。相互嫌悪感情の拡散も、その憂慮すべき現象の一部でありましょう。まさにこのような局面において本賞を賜ったことは、東アジアに生きる人びとの共生の道を探求する営みこそ、現代にいっそう必要であるという支持と激励に他ならないと受けとめております。この道とともに歩むとき、共生の道、代替的な文明へと至る歩みが、よりいっそう軽やかなものとなると信じます。

私たちが恩恵によって結ばれた縁の世界に生きていることを改めて思い起こし、その恩を感じ、知り、報いることの重要性を深く痛感いたします。ありがとうございました。

授賞式インタビュー

東アジアにおける平和への期待について語り、「人間同士はもちろん、すべての事物が縁で結ばれている」という東アジアの知恵を再び活性化させることが重要だと説きました。そして、若者たちの志の中に「希望の光を見た」と語り、共生の道を探求していくことの重要性を訴えました。

学校訪問レポート

開催日／2025年9月18日(木) 会場／福岡市立千早西小学校

「アンニョンハセヨ！」と音楽室中に響く児童たちの元気な挨拶で迎えられたペク氏。「食べ物から見る東アジア」をテーマに講演を行いました。

ペク氏の「ちゃんぽん、ジャージャー麺、ラーメン。これらの料理はどここの食べ物だと思いますか？」という問いに児童たちは目を輝かせながら耳を傾けました。そこには国境を越えた壮大な物語と、日本、韓国、中国の意外なつながりが隠されていたのです。

ちゃんぽんは長崎で中国人留学生のために考案された後、韓国に渡って「韓国ちゃんぽん」へ進化したことや、韓国の国民食であるジャージャー麺が、中国とは異なる独自の味付けで根付いたことなど

を紹介しました。ペク氏は、これらの料理が特定の国の所有物ではなく、起源、伝播、変形という三つの段階を経て生まれた「共同作品」であると解説。「身の回りの物事がどんな歴史をたどってきたか思いを馳せることを『歴史する』と呼びます」と話し、「歴史する心で日常を見つめれば、給食のメニューにも奥深い背景があることに気づき、世界はもっと面白く、奥深いものになるはずです」と熱く語りました。

質疑応答では、ペク氏と児童たちの間に活発なやり取りが生まれ、児童たちが日常の食を通して「連動する東アジア」を感じる貴重な機会となりました。



◆ 市民フォーラム 学術研究賞

「実践的課題としての東アジア」

日時／2025年9月17日(水)15:00～17:00
会場／アクロス福岡 円形ホール

クロストーク



クロストーク登壇

木宮正史(東京大学名誉教授)

中島隆博(東京大学東洋文化研究所 所長)

国際政治学者の木宮氏をモデレーターに、中国哲学研究者の中島氏、中国現代史研究者のペク氏の3名で、東アジアをめぐる学術的かつ現実的な課題について、幅広い議論が交わされました。

まず「実践的課題としての東アジア」というテーマについて、ペク氏は東アジアを地理的に固定された領域ではなく、歴史的・社会的文脈や具体的な実践課題によって変容する概念であると位置づけました。さらに、学問は制度ではなく運動であり、相互省察と自己変革の循環が重要であると強調しました。中島氏もこの考えに賛同し、東アジアを国ごとに分節せず、「問いを立てる」ことによって新しい地平が開けると指摘しました。韓国の民主化運動を例に挙げ、私たちが社会にどう関与するかが問われていると述べました。



研究対象を中国にした理由について、ペク氏は、1970年代の中国は文化大革命の最中で、その姿を通して韓国社会を批判的に照らし出す「鏡」と捉えていたと明かします。その後は近代化の意味を追求する事例として、現在は隣国との相互作用に注目して研究している、と話しました。中島氏は、西洋中心主義的な考え方に対して、「マイナーな哲学」の場として中国を選び、中国を鏡として互いに変容していく必要があると説きました。

ペク氏は自身の研究を「批判的中国研究」と称し、学際的研究を目指し、古典と現代を分離せずに捉え、相互省察の契機として、中国中心主義を解体することが要件であると述べました。また、中国への批判と共感を両立させて、新たな秩序や文明の構築に寄与することを目指していると話しました。中島氏も、中国を客観視して分析するのではなく、相互に関与し影響を与え合いながら研究が進んでいることの意義を強調しました。

後半は、米中関係や新冷戦の懸念、韓国の若者による「光の革命」など政治まで話題が及びました。現代の混沌とした国際情勢において、ペク氏は学者的問題意識と商人的現実感覚を両立することが重要であると指摘し、中島氏は世界を二項対立で捉えるのではなく、民主主義を深化させつつ、それぞれの国の多様な考えを持つ人々と、複数のチャンネルを通じて対話を続けることが不可欠と訴えました。政治家のみならず、学者や市民が国境を超えてつながることで、東アジアや世界がより良い方向に進むと結び、示唆に富むクロストークは幕を閉じました。



木宮正史氏



中島隆博氏



◆ 受賞コメント

本日、福岡アジア文化賞をいただき、心から光栄に思い、深く感動しております。

この賞は、私一人の成果ではなく、これまでの歩みを思い出させてくれるものです。今日の成果は、日本政府の奨学金で日本に留学した十年間のおかげです。その間、素晴らしい先生方と出会い、素晴らしい教育を受け、そして豊かな文化の中で学ぶことができました。

日本の建築は本当に美しく、多くの日本の建築家がプリツカー賞を受賞しています。その精神と創造力は、私の情熱と夢を育ててくれました。

福岡アジア文化賞に、そして日本に、心から感謝いたします。

ありがとうございました。

授賞式インタビュー

インタビューでは、日本で建築だけでなく、環境や構造設計、さらには流体力学の修士論文を執筆するなど幅広く学んだ経験が、ベトナムでの「環境に優しい建築」に活かされていると明かしました。竹などの自然素材で大きな空間を創り出す技術や、日本の仕事に対する精神もベトナムに持ち帰ったと語りました。

ギア氏にとって建築とは、単に人が住むための器ではなく、人と自然をつなげるものであり、伝統と文化を時間をかけて作っていく重要なものであると言えます。そのモチベーションの原点は、電気がなかった故郷での「気候風土に調和し、自然と共生する暮らし」の記憶と、インターネット社会で希薄になった「人と人、人と自然のつながりを取り戻したい」という強い思いにあると語りました。

◆ 市民フォーラム 芸術・文化賞

「躍動する東南アジアの建築シーン」

日時／2025年9月15日(月・祝)13:30～15:30

会場／福岡市美術館 ミュージウムホール

第1部 基調講演



ベトナムで生まれ、東京大学などで建築を学んだ後、2006年にホーチミンで建築設計事務所を設立したギア氏。急速な都市化が進むベトナムにおいて、地域や環境に合った緑を取り入れることで遮熱や換気を高める建築や、竹や木を用いたユニークな建築を生み出し、数々の賞に輝いています。

ギア氏は、ベトナムでは発展による人口増加に伴い、環境汚染やメンタルヘルスが問題になっていると指摘。自身が手掛けた建築作品の写真や図面を示しつつ、それぞれの背景や構造、工夫した点などを解説しました。緑化による遮光や遮熱、中庭や通気孔による通風を取り入れた建築は、地球にも人にも優しいという利点があります。個人宅の案件では「うつ病を和らげたい」「子どもがゲームばかりして困る」といった悩みに寄り添い、建築の力でいかに解決を図ったかを話しました。

また、自らがメンタルヘルスのために毎日行う瞑想を紹介。雑念が消え、仕事の能率が格段に上がったと述べ、ギア氏のガイドにより観客全員で数分間、瞑想を行いました。



第2部 クロストーク



クロストーク登壇

西村幸夫（國學院大學観光まちづくり学部長）

岩元真明（九州大学芸術工学研究院准教授）

2011年から4年間、ギア氏の事務所で仕事のパートナーとして一緒に働いた岩元氏。建築基準法が異なる日本では、竹建築にどのような可能性があるかとの問いを投げかけました。ギア氏は、自身が学生時代に初めて関わった木造ビルを例示し、日本の高い技術力を生かせば、木と竹のハイブリッドで美しい建築ができるのではないかと期待を語りました。

次に西村氏が、日本で建築の教育を受けたことが、自身の建築哲学にどのような影響を与えたかと質問しました。ギア氏は、日本にはプリツカー賞を受賞するような世界トップレベルの建築家がいる、ベトナムに近い素材や気候をはじめ、文化やディテールまでよく学べたと回答。さらに、師事した内藤廣氏に厳しい指導を受け、期せずして修士論文のテーマを「通風」にしたことが今の仕事にもつながっていると振り返りました。また、竹を取り入れたきっかけについて、ベトナムで事務所を立ち上げたばかりの頃、仕事がまだ多忙でなく時間に余裕があったため、安価な竹に注目して使ってみたところ面白いものができたと明かしました。

この他にも、日本とベトナムの働き方の違い、瞑想の活用法などにも言及。会場から次々と質問があがり、ギア氏の率直で、ときにユーモアを交えた話に、終始楽しい雰囲気トークとなりました。



西村 幸夫氏



岩元 真明氏

学校訪問レポート

開催日／2025年9月17日(水) 会場／博多工業高校

博多工業高校建築科の1年生から3年生、総勢120名が待つ教室に、ギア氏は招かれました。開始早々、「まずは一緒に瞑想をしましょう」との呼びかけこの日を楽しみにしていた生徒の皆さんは、いくぶん戸惑いながらも、次第にリラックスした雰囲気に変化していきました。

ギア氏にとって、建築と瞑想は、切っても切り離せない特別な「習慣」です。思春期特有の複雑な感情を理解し、その困難な時期を乗り越えるためにも、生徒たちに瞑想技術を伝えたいと、思いを語りました。

自身の建築哲学については「安価でローカルな素材とエコロジカルな資材を組み合わせたハイブリッド建築」とであると

解説しました。ギア氏の建築作品は複雑に見える構造ですが、実はシンプルな原理に基づいています。こうした創造性を育むためには、心が落ち着いていることが不可欠と話し、瞑想に集中力や柔軟性を向上させる効果が科学的に示されていることについて力説されました。

最後に寄せられた質問では、瞑想の実践へ関心を高めた熱心な声もあがりました。ギア氏からのメッセージは、しっかりと生徒の心に届いたようです。



歴代受賞者学術交流／特別企画

ラオスの織物に宿る神話 ～ナーガ文様の意味と未来

2005年(第16回)芸術・文化賞受賞者
ドアンドゥアン・ブンニャウオン(織物研究家・作家)

日 時／2025年11月3日(月・祝)
13:00～15:00
会 場／JR博多シティ10F大会議室
主 催／九州大学アジア・
オセアニア研究教育機構、
福岡市、(公財)福岡よかとピア
国際交流財団



ラオスの古典文学と伝統織物を研究し、その保存と普及に大きく貢献してきたドアンドゥアン・ブンニャウオン氏。冒頭、ラオスの伝統織物に繰り返し登場するナーガ(龍神)文様が2023年にユネスコの無形文化遺産として登録されたことに触れ、「ラオスにとって大変光栄です」と笑顔で述べました。

ドアンドゥアン氏は、まずラオスにおける織物の歴史と多様な織り技法について説明しました。ラオスは長期的な戦争や植民地支配などに直面してきたものの、少なくとも3000年前から



ドアンドゥアン・ブンニャウオン氏

さまざまな民族がいくつもの織り技法を受け継ぎ、多様な文様を布に織り込んできました。家庭内で祖母から母、娘へと受け継がれてきた技法や文様の意味について、1970年代に研究と技術教育が始まりました。ドアンドゥアン氏も研究に携わり、1995年に本を出版。織物は女性に収入をもたらしてきたこと、近年は国際機関の支援による技術教育プロジェクトが実施されていることなどにも言及しました。

次に、伝統織物の文様について、詳しく解説しました。ナーガは巨大な龍や蛇の形をした神聖な存在で、ラオスでは古くから数十種類ものナーガが織り込まれてきたとのこと。また、織物の文様は、動物や植物、太陽や星といった自然、寺院や飛行機など人が作ったものや、カエル人間など民話や信仰から想像したものなど多岐にわたります。「文字の読み

書きができない女性でも、布に文様を織り込む能力を発揮してきた」と話しました。

さらに、ナーガに関するいろいろな伝説や民話を紹介。「ナーガ文様の布」をテーマにした踊りとドアンドゥアン氏が作詞した民謡の上映もありました。会場には様々な模様の織物が展示され、一点一点丁寧に説明。来場者は終始熱心に耳を傾け、講演後には会場から次々と質問があがりました。ラオスの織物において、とりわけナーガは女性の織り手たちが創造性豊かに生み出してきた特別な文様であり、未来へと継承されるべき大切な文化遺産であることを深く理解できる時間となりました。



特別企画「アジア文化賞アカデミー」

福岡アジア文化賞 各受賞者の研究内容やその活動を、より楽しく深めるための学びと交流の機会を提供する特別プログラムとして、「アジア文化賞アカデミー」を開催しました。

◆ 音声予習講座

市民フォーラムの登壇者を講師にお迎えしLOVE FMで放送中のアート&カルチャープログラム「OUR CULTURE, OUR VIEW」の番外編として福岡アジア文化賞公式YouTubeチャンネルで配信しました。

出演者：三好 剛平(三声舎)、佐藤 ともやす

1時限目 高良 倉吉 編

講師：河野 俊行 (九州大学高等研究院 特別主幹教授/国際イコモス名誉会長)

2時限目 白 永 瑞(ベク・ヨンソ) 編 講師：中島 隆博 (東京大学東洋文化研究所 所長)

3時限目 ヴォ・チョン・ギア 編 講師：岩元 真明 (九州大学芸術工学研究院 准教授)



特別講座 | ギア先生の建築と瞑想の教室

芸術・文化賞受賞者である建築家、ヴォ・チョン・ギア氏を迎え、自身の建築活動の紹介に加え、ギア氏が実践を続けている瞑想に地元の小学生がチャレンジする体験授業を開催。参加した子ども達からは「ギアさんの建築をいつか自分の目で見てみたかった」という声や「初めての瞑想で気持ちよくなったので今度から家でもやってみたい」といった感想が寄せられました。

日 時／2025年9月14日(日)11:00～12:00
会 場／福岡市美術館 レクチャールーム
登 壇／ヴォ・チョン・ギア(建築家)
対 象／小学校4～6年生



特別講座 | 「東アジアと人文学」白永瑞×平野啓一郎

学術研究賞受賞者である白永瑞(ベク・ヨンソ)氏と、小説家の平野啓一郎氏による対談をオンラインで開催しました。ベク氏の思想活動を展望する前半のプレゼンテーションを受け、後半は平野氏との対話を展開。ベク氏が提起した「普遍性」をめぐる議論では、様々な地域で発される人々の声に耳を傾け、そこから普遍性を見出すこと、そしてその声を受けて自身をも変容させながら社会を共に創造する姿勢の重要性が語られました。また、ベク氏が平野氏の著書からの一言を取り上げ、私たち一人ひとりが「守心正気」に修養を重ね、社会変革に向かっていくことが「美しい世界」を実現する道ではないかと語りました。

1時限目 日 時／2025年11月8日(土)11:00～13:00
会 場／福岡市総合図書館 第一会議室
登 壇／白永瑞(歴史学者)、平野啓一郎(小説家)



特別講座 | 「沖縄と、台湾と」高良倉吉×高妍

大賞受賞者である高良倉吉氏と、台湾出身の漫画家の高妍(ガオ・イェン)氏が対談。琉球史研究を重ねてきた高良氏と、沖縄を訪れた女子留学生在が台湾と沖縄に共通する歴史的経験を見出していく漫画『隙間』を描いた高氏。歴史学者と漫画家というそれぞれの立場から「歴史」と対峙し、それを人々と共有できるものにすべく活動する2人。「私たちの主体性が悲しみと憎しみだけであってはいけない」という想いから完成させたという高氏の作品へ高良氏は「台湾と沖縄の人々が自らの歴史を知り、対話を始めるきっかけになる」とコメント。参加者からも活発な質疑応答が交わされました。

2時限目 日 時／2025年11月8日(土)15:00～17:00
会 場／福岡市総合図書館 第一会議室
登 壇／高良倉吉(歴史学者)、高妍(漫画家)



歴代受賞者
名鑑

第1回 1990

創設特別賞

ジョゼフ・ニーダム

Joseph NEEDHAM(英国/中国科学史研究者)



中国科学史の世界的権威であり、非ヨーロッパ文明に対する世界の知識人の見方を一変させた。

創設特別賞

ククリット・プラモート

Kukrit PRAMOJ(タイ/作家・政治家)



大河小説『王朝年代記』ほか多くの傑作をものした文豪であり、首相を務めたタイ屈指の文人政治家。

創設特別賞

矢野 暢

YANO Toru(日本/社会学者)



日本の東南アジア地域研究の先駆者。国際学術交流にも貢献した。

第2回 1991

大賞

ラヴィ・シャンカール
Ravi SHANKAR

(インド/音楽家・シタール奏者)



豊かな感受性と幅広い表現力でビートルズにも影響を与えた伝統弦楽器シタール奏者。

学術研究賞

タウフィック・アブドゥラ
Taufik ABDULLAH

(インドネシア/歴史学者・社会学者)



東南アジアのイスラム、地方史に関する意欲的な研究で知られる歴史学者、社会学者。

学術研究賞

中根 千枝
NAKANE Chie

(日本/社会人類学者)



アジア諸地域での豊富な調査に基づく研究により、「タテ社会論」等独特の社会構造論を提唱した社会人類学者。

芸術・文化賞

ドナルド・キーン
Donald KEENE

(米国/日本文学・文化研究者)



大著『日本文学史』はじめ多くの著作を世に送り、研究の礎を築いた、日本文学研究の国際的権威。

第3回 1992

大賞

金元龍
KIM Won-yong

(韓国/考古学者)



東アジア全体の視野の中で韓国考古学・美術史学を体系的に位置づけ、その発展に大きく貢献をなした考古学者。

学術研究賞

クリフォード・ギアツ
Clifford GEERTZ

(米国/文化人類学者)



インドネシアでの調査を通じ、異文化理解のための独自の解釈人類学を築き上げた文化人類学者。

学術研究賞

竹内 實
TAKEUCHI Minoru

(日本/中国研究者)



社会科学・文学・思想・歴史に亘る総合的な現代中国論を構築した、日本の中国研究の第一人者。

芸術・文化賞

レアンドロ・V・ロクシン
Leandro V. LOCSIN

(フィリピン/建築家)



東南アジアの風土性とフィリピンの伝統様式の中に現代建築を定着させた建築家。

第4回 1993

大賞

費孝通
FEI Xiaotong

(中国/社会学・人類学者)



中国の伝統文化に基づいた視点からの独自の的方法論により、中国社会を多面的に分析した社会学・人類学者。

学術研究賞

ウンク・A・アジズ
Ungku A. AZIZ

(マレーシア/経済学者)



マレーシアの実証的研究に優れた業績をあげた経済学者。

学術研究賞

川喜田 二郎
KAWAKITA Jiro

(日本/民族地理学者)



ネパールとヒマラヤ地域の人間の生態を体系的に捉え、KJ法など独自の的方法論を創出した民族地理学の第一人者。

芸術・文化賞

ナムジリン・ノロバンザト
NAMJILYN Norovbanzad

(モンゴル/声楽家)



モンゴルの伝統的な民謡オルティン・ドーで豊かな表現力を持つ、傑出した声楽家。

第5回 1994

大賞

スパトラディット・ディッサクン
M. C. Subhadradis DISKUL

(タイ/考古学・美術史学者)



タイ美術・考古学・歴史の世界的権威。東南アジア伝統文化の復興と世界史的な位置づけに果たした功績は偉大。

学術研究賞

王 廣 武
WANG Gungwu

(オーストラリア/歴史学者)



華人のアイデンティティ論などユニークな研究でアジア研究をリードする歴史学者。

学術研究賞

石井 米雄
ISHII Yoneo

(日本/東南アジア研究者)



タイを中心として歴史、宗教、社会を学際的に研究し、地域研究の発展に貢献した東南アジア研究者。

芸術・文化賞

パドマー・スブラマニヤム
Padma SUBRAHMANYAM

(インド/舞踊家)



インド古典舞踊バーラタ・ナートィヤムの第一人者。実践、創作に加えて舞踊学校の設立など教育面にも貢献。

第6回 1995

大賞

クンチャランングラット
KOENTJARANINGRAT

(インドネシア/文化人類学者)



インドネシアにおける文化人類学の確立と発展に貢献した文化人類学者。

学術研究賞

韓 基 彦
HAHN Ki-un

(韓国/教育学者)



独創的な基礎主義の理論を提唱し、教育理論体系を築き上げた教育史・教育哲学の研究者。

学術研究賞

辛島 昇
KARASHIMA Noboru

(日本/歴史学者)



刻文資料に通暁し、中世南インドの歴史像を書き換えた、アジア史研究の世界的権威。

芸術・文化賞

ナム・ジュン・パイク
Nam June PAIK

(米国/ビデオ・アーティスト)



テクノロジーと美術を調和させた新しい領域の芸術を開拓した、ビデオ・アートの世界的第一人者。

第7回 1996

大賞

王 仲 殊
WANG Zhongshu

(中国/考古学者)



古代日中交流史の研究に顕著な業績をあげるとともに、中国における考古学の発展の礎を築いた考古学者。

学術研究賞

ファン・フイ・レ
PHAN Huy Le

(ベトナム/歴史学者)



イデオロギーにとられない研究姿勢を貫き、ベトナム農村社会史研究に新知見をもたらした歴史学者。

学術研究賞

衛藤 藩 吉
ETO Shinkichi

(日本/国際関係研究者)



中国政治・外交史および国際関係論の分野における日本の第一人者であり、日本外交への提言も数多い。

芸術・文化賞

ヌスラット・ファテ・アリー・ハーン
Nusrat Fateh Ali KHAN

(パキスタン/カヴァーリー歌手)



イスラム宗教歌謡カヴァーリーにおいて並ぶ者のいない、パキスタンの国民的歌手。

第8回 1997

大賞

チェン・ボン
CHHENG Phon

(カンボジア/劇作家・芸術家)



内戦で荒廃したカンボジアにおいて、伝統文化保存の枠組みを構築し、民族精神の回復を訴えた劇作家。

学術研究賞

ロミラ・ターパル
Romila THAPAR

(インド/歴史学者)



独立以後のインド史研究を人類史の中に位置づけて実証的に提示し、従来の歴史叙述を一変させた女性歴史学者。

学術研究賞

樋口 隆康
HIGUCHI Takayasu

(日本/考古学者)



フィールドワークを重視し、シルクロード・中国・古代日中交流史考古学的研究の発展に大きく貢献した考古学者。

芸術・文化賞

林 権 澤
IM Kwon-taek

(韓国/映画監督)



韓国の苦難の近現代史を人々の生き方を通して美しく描き出したアジア映画界の巨匠。

第9回 1998

大賞

李 基 文
LEE Ki-Moon

(韓国/言語学者)



韓国語と日本語、アルタイ諸語の比較研究を行い、新しい視点を導入した韓国語研究の国際的権威。

学術研究賞

スタンレー・J・タンバイア
Stanley J. TAMBIAH

(米国/人類学者)



タイ・スリランカを中心として実証的な研究を行い、オリジナルな解釈を提示した人類学者。

学術研究賞

上田 正昭
UEDA Masaaki

(日本/歴史学者)



日本における古代国家形成過程を、東アジアの視点から解明した歴史学者。

芸術・文化賞

R. M. スダルソノ
R. M. Soedarsono

(インドネシア/舞踊家・舞踊研究者)



芸術学・歴史学・文学などを幅広く研究する一方、舞踊創作・教育にも多大な業績を上げたインドネシアの代表的舞踊家。

FUKUOKA PRIZE Roll of Honor 1990-2024

第10回

1999

大賞

侯孝賢
HOU Hsiao-hsien
(台湾／映画監督)



厳しい現実を見つめる眼差しと、台湾の風土と人間への愛を以て『悲情城市』などの名作を生んだ世界的な映画監督。

学術研究賞

大林 太良
OBAYASHI Taryo
(日本／民族学者)



日本民族の文化形成の過程を、アジア諸地域の文化との比較検討において解明した民族学研究的泰斗。

学術研究賞

ニティ・イヨウシーウォン
Nidhi EOSEEWONG
(タイ／歴史学者)



斬新な発想でタイの歴史の大半を書き換えた歴史学者であり、社会的な文章を世に問い続ける文筆家。

芸術・文化賞

タン・ダウ
TANG Da Wu
(シンガポール／ヴィジュアルアーティスト)



独創的な表現活動で、東南アジアにおける現代美術の創造的発展を主導したシンガポールの現代美術家。

第11回

2000

大賞

プラムディヤ・アナンタ・トゥール
Pramoedya Ananta TOER
(インドネシア／作家)



『人間の大地』をはじめインドネシアの民族意識を扱った作品群で民族と人間の問題を一貫して問いつけた作家。

学術研究賞

タン・トゥン
Than Tun
(ミャンマー／歴史学者)



厳密で実証的な歴史学の方法論によりミャンマー(ビルマ)史を塗り替えた歴史学者。

学術研究賞

ベネディクト・アンダーソン
Benedict ANDERSON
(アイルランド／政治学者)



世界規模の比較歴史的研究を推進し、『想像の共同体』でナショナリズム研究に新局面を拓いたアイルランドの政治学者。

芸術・文化賞

ハムザ・アワン・アマット
Hamzah Awang Amat
(マレーシア／影絵人形造い)



マレーシアを代表する影絵人形芝居ワヤン・クリットのダラン(影絵人形造い)。

第12回

2001

大賞

ムハマド・ユヌス
Muhammad YUNUS
(バングラデシュ／経済学者)



「グラミン銀行」を創始してマイクロクレジットで開発と貧困根絶に挑戦するバングラデシュの経済学者。2006年ノーベル平和賞受賞。

学術研究賞

速水 佑次郎
HAYAMI Yujirō
(日本／経済学者)



市場と国家の関係に共同体の視点を盛り込んだ「速水開発経済学」とも称される学問体系を構築した。

芸術・文化賞

タワン・ダッチャニー
Thawan DUCHANEE
(タイ／画家)



タイの画家。現代人に潜む狂気や退廃、暴力、エロス、死などを独特の画風で表現し、世界に衝撃を与えた。

芸術・文化賞

マリルー・ディアス＝アバヤ
Marilou DIAZ-ABAYA
(フィリピン／映画監督)



民衆の喜びや悲しみを描き出した作品を通してアジアの心を世界に伝える、フィリピンを代表する映画作家。

第13回

2002

大賞

張芸謀
ZHANG Yimou
(中国／映画監督)



現代中国の苦難に満ちた歩みを、一貫して農民・民衆の立場から描いてきた映画界の巨匠。

学術研究賞

キングスレー・M・デ・シルワ
Kingsley M. DE SILVA
(スリランカ／歴史学者)



スリランカにおける植民地時代の実証研究を通じて歴史学研究に多大な貢献をした歴史学者。

学術研究賞

アンソニー・リード
Anthony REID
(オーストラリア／歴史学者)



『大航海時代の東南アジア』などで、民衆の生活史の視点から東南アジア史に新境地を拓いたオーストラリアの歴史学者。

芸術・文化賞

ラット
Lat
(マレーシア／マンガ家)



マレーシアの大衆の生活を基底に、社会の矛盾を鋭利な諷刺の目で切り取って表現したマンガ家。

第14回

2003

大賞

外間 守善
HOKAMA Shuzen
(日本／沖縄学者)



「沖縄学」を大成し、伝統的な言語・文学・文化の分野を中心に常に沖縄研究をリードしてきた研究者。

学術研究賞

レイナルド・C・イレート
Reynaldo C. ILETO
(フィリピン／歴史学者)



東南アジアで最初の反植民地・独立闘争であるフィリピン革命の先導的研究者。

芸術・文化賞

徐 冰
XU Bing
(中国／アーティスト)



独創的な「偽漢字」や「新英文書法」の創造を通じて東洋と西洋の文化の融合を試み、アジア現代美術の評価を高めたアーティスト。

芸術・文化賞

ディック・リー
Dick LEE
(シンガポール／シンガーソングライター)



シンガポールの多文化社会に生まれ、アイデンティティを追求する中で独特な音楽を開花させた、アジア・ポピュラー音楽の旗手。

第15回

2004

大賞

アムジャッド・アリ・カーン
Amjad Ali KHAN
(インド／サロッド奏者)



インド古典弦楽器「サロッド」演奏の巨匠。「音楽はあらゆるものを越える」という信念のもと、アジア音楽の精神を広く伝えた。

学術研究賞

厲以寧
LI Yining
(中国／経済学者)



中国の経済改革の必要性をいち早く理論的に提起し、改革の実現への道程を準備した経済学者。

学術研究賞

ラーム・ダヤル・ラケーシュ
Ram Dayal RAKESH
(ネパール／民俗文化研究者)



ネパール女性に関する諸問題にも取り組む、ネパールの民俗文化研究の第一人者。

芸術・文化賞

ローランド・シルワ
Roland SILVA
(スリランカ／文化遺産保存建築家)



イコモス(国際記念物遺跡会議)委員長を務めアジア遺産の評価と保存に大きく貢献したスリランカの遺跡保存の専門家。

第16回

2005

大賞

任東權
IM Dong-kwon
(韓国／民俗学者)



韓国民俗学の開拓者であり、日韓中の学術交流にも大きく貢献した東アジア民俗学界の第一人者。

学術研究賞

トー・カウ
Thaw Kaung
(ミャンマー／図書館学者)



貴重な貝葉写本の保存と活用による多大な業績をあげた、図書館学者であり、古文書保存学の泰斗。

芸術・文化賞

ドアンドゥアン・ブンニャウオン
Douangdeuane BOUNYAVONG
(ラオス／織物研究家)



ラオス伝統織物の研究と啓蒙活動を通じて、ラオスおよびアジアの伝統文化の保存と継承に大きな貢献をしている織物研究家。

芸術・文化賞

タシ・ノルブ
Tashi Norbu
(ブータン／伝統音楽家)



ブータンの民間人としては初めて、音楽を中心に伝統文化の保存と継承に取り組んでいるパイオニア。

第17回

2006

大賞

莫言
MO Yan
(中国／作家)



現代中国文学を代表する作家。中国の都市と農村の現実を独特のリアリズムと幻想的な方法によって描いた、世界文学の旗手。2012年ノーベル文学賞受賞。

学術研究賞

シャグダリン・ビラ
Shagdaryn BIRA
(モンゴル／歴史学者)



世界規模でのモンゴル研究のリーダーであり、歴史・文化・宗教・言語にわたる優れた研究業績を残した歴史学者。

学術研究賞

濱下 武志
HAMASHITA Takeshi
(日本／歴史学者)



アジア域内の交易・移民・送金のネットワークに焦点をあて、斬新な方法で地域の歴史像の構築に先駆的役割を果たした歴史学者。

芸術・文化賞

アクシ・ムフティ
Uxi MUFTI
(パキスタン／民俗文化保存専門家)



「ローク・ヴィルサ」を創設しパキスタン文化の基層を実証的に追求し続ける、民俗文化保存の第一人者。

第18回

2007

大賞

アシシュ・ナンディ
Ashis NANDY
(インド／社会・文明評論家)



臨床心理学と社会学を統合させた独自の方法論によって、鋭い社会・文明評論活動を行う行動的知識人。

学術研究賞

シーサク・ワンリポードム
Srisakra VALLIBHOTAMA
(タイ／人類学・考古学者)



関係諸学を統合しつつ、徹底した現地調査に基づいて、タイの新しい歴史像を再構築した人類学・考古学者。

芸術・文化賞

朱 銘
JU Ming
(台湾／彫刻家)



深い東洋の精神性を示す表現力と常に革新を求める創造へのエネルギーをあわせもつ、彫刻の巨匠。

芸術・文化賞

金徳洙
KIM Duk-soo
(韓国／伝統芸能家)



「サムルノリ」を創始し、伝統音楽を継承すると同時に先端的音楽を創造し続ける伝統芸能家。

第19回

2008

大賞

アン・ホイ
Ann HUI
(香港／映画監督)



幅広いジャンルで多くの話題作を発表して香港映画界を牽引する、アジアの女性監督のパイオニア。

学術研究賞

サヴィトリ・グナセーカラ
Savitri GOONESEKERE
(スリランカ／法学者)



南アジアにおける人権やジェンダーに関する研究で優れた業績を挙げ、高等教育の改革にも尽力した法学者。

学術研究賞

シャムスル・アムリ・バハルディーン
Shamsul Amri Baharuddin
(マレーシア／社会人類学者)



民族問題・マレー世界の研究を東南アジアにおいて一貫してリードする社会人類学者。

芸術・文化賞

フォリダ・パルビーン
Farida Parveen
(バングラデシュ／音楽家)



バングラデシュの伝統的な宗教歌謡バウル・ソングの芸術的評価を高め、国際的な普及に貢献した国民的歌手。

第20回

2009

大賞

オギュスタン・ベルク
Augustin BERQUE
(フランス／文化地理学者)



欧日の人間社会と空間・景観・自然に対しての哲学的思索を重ね、独自の風土学を構築し、日本文化を実証的に捉えて、日本理解に大きく貢献した文化地理学者。

学術研究賞

パルタ・チャタジー
Partha CHATTERJEE
(インド／政治学・歴史学者)



正統な歴史から振り落とされてきた「声なき人々」の存在を明らかにし、アジアや途上国の視点から先鋭な問題提起を行ってきた政治学者・歴史学者。

芸術・文化賞

三木 稔
MIKI Minoru
(日本／作曲家)



邦楽の現代化と国際化をリードし、日本とアジア、また東洋と西洋の音楽の交流と創造に大きな貢献をなした作曲家。

芸術・文化賞

蔡國強
CAI Guoqiang
(中国／現代美術家)



北京五輪での花火の演出を手がけるなど、火薬や花火を用いた独創的手法と、中国伝統の世界観に根ざした表現で、芸術表現の新たな可能性を拓いた現代美術家。

第21回

2010

大賞

黄秉冀
HWANG Byung-ki
(韓国／音楽家)



韓国の伝統的楽器「伽倻琴(カヤグム)」の伝統を継承し、また新たな音楽独創を融合した演奏家であり作曲家。

学術研究賞

ジェームズ・C・スコット
James C. SCOTT
(米国／政治学者・人類学者)



東南アジアから始まり近現代世界における国家の支配とそれに反発し、抵抗する人々の関係を明らかにした政治学者であり人類学者。

学術研究賞

毛里 和子
MORI Kazuko
(日本／現代中国研究者)



アジア地域研究の共通基盤となる方法的枠組みの構築に大きく貢献した、政治学者であり、日本における現代中国研究の第一人者。

芸術・文化賞

オン・ケンセン
ONG Keng Sen
(シンガポール／舞台芸術家)



現代的な感覚でアジアと欧米の伝統を鮮やかに出合わせる演出作品は、舞台芸術の国際的フロンティアを切り拓く。世界的に活躍する舞台芸術の旗手。

第22回

2011

大賞

アン・チュリアン
ANG Choulean
(カンボジア／民族学者・クメール研究者)



「カンボジア人によるカンボジア研究」の立場から、長い歴史に立脚した生活文化要素を自らの民族感性で解明。さらにアンコール遺跡群の救済事業における国際的枠組みをつくったカンボジアを代表する民族学者。

学術研究賞

趙東一
CHO Dong-il
(韓国／文学者)



主著『韓国文学通史』全6巻は、韓国文学研究史上の金字塔と評され、研究領域は儒教・漢字文化圏全域に及ぶ。韓国、日本、中国、ベトナムの比較文学・比較文明の研究者。

芸術・文化賞

ニールズ・グッチョウ
Niels GUTSCHOW
(ドイツ／建築史家・修復建築家)



南アジアを中心とした歴史的建築や都市への洞察を深め、建造物と都市の保存と修復を学際的研究から高次の哲学的営為として昇華させ先導してきた建築史家・修復建築家。

第23回

2012

大賞

ヴァンダナ・シヴァ
Vandana SHIVA
(インド／環境哲学者)



開発やグローバリゼーションのもたらす矛盾を鋭く指摘し続け、自然を慈しみ、生命の尊厳を守る斬新な思想を語り、多くの民衆を導いてきた環境哲学者。

学術研究賞

チャーノウィット・カセートシリ
Charnvit KASETSIRI
(タイ／歴史学者)



アユタヤ史の研究において傑出した業績をあげたほか、タイ近現代史の研究成果を教育に取り入れ、活発な啓蒙活動を行う東南アジアを代表する歴史学者。

芸術・文化賞

キドラット・タヒミック
Kidlat TAHIMIK
(フィリピン／映画作家・アーティスト・文化観察者)



途上国フィリピンに生きる者の矜持と文化帝国主義批判を独特のユーモアに包んで描く作品群を発表してきた、アジアの個人映画作家の先駆的存在。

芸術・文化賞

クス・ムルティア・バク・ブウォノ
G.R.Ay. Koes Murtiyah Paku Buwono
(インドネシア／宮廷舞踊家)



幼少よりジャワ文化を深く学び、300年に及ぶ伝統的宮廷舞踊を広く世に紹介するとともに、中部ジャワ伝統文化の保存と発展に尽力してきた、宮廷舞踊の継承者。

第24回

2013

大賞

中村 哲
NAKAMURA Tetsu
(日本／医師)



パキスタンとアフガニスタンで、30年にわたり患者、貧者、弱者のための医療や開拓・民生支援の活動を続け、異文化の理解と尊重を求める国際協力を実践。

学術研究賞

テッサ・モーリス＝スズキ
Tessa MORRIS-SUZUKI
(オーストラリア／アジア地域研究者)



民族や国家の境界を越え、新しい地域協力や市民社会の在り方を社会の端から構想し、アジアの人々の相互理解に多大な貢献を為しているアジア地域研究者。

芸術・文化賞

ナリニ・マラニ
Nalini MALANI
(インド／アーティスト)



映像や絵画を組み合わせた大がかりな空間造形を通して、宗教対立や戦争、女性への抑圧、環境破壊など、世界が直面する今日的かつ普遍的なテーマに挑み続ける美術家。

芸術・文化賞

アピチャップン・ウィーラセタクン
Apichatpong WEERASETHAKUL
(タイ／映画作家・アーティスト)



民話や伝説の中に個人の記憶や前世のエピソード、時事問題に対する言及などを挿入する斬新な映像話法で世界の映画界に大きな旋風を巻き起こしている気鋭の映画作家。

第25回

2014

大賞

エズラ・F・ヴォーゲル
Ezra F. VOGEL
(米国／社会学者)



戦後アジアの政治経済社会の変動や、アジアの新工業経済地域(NIEs)の先駆的な研究に業績をもち、国際関係に関する冷静で重みのある提言を行う東アジア研究の権威。

学術研究賞

アジュマルディ・アズラ
Azyumardi AZRA
(インドネシア／歴史学者)



イスラームの宗教・文化の深い理解に基づき、多元的で調和ある市民社会の形成に尽力し、異文化間の相互理解に貢献するパブリック・インテレクチャル。

芸術・文化賞

ダニー・ユン
Danny YUNG
(香港／文化クリエイター)



多数の斬新な舞台作品を発表する一方、文化政策や芸術教育にも取り組み、アジアと世界、伝統と現代を繋ぐ多彩な活動でアジアの芸術文化を牽引する文化クリエイター。

第26回

2015

大賞

タン・ミン・ウー
Thant Myint-U
(ミャンマー／歴史学者)



グローバルな視点からミャンマーの歩みを綴る傑出した歴史家であるとともに、歴史的建造物の保存や持続可能な都市計画に取り組み、自国の平和創造をめざす知的指導者。

学術研究賞

ラーマチャンドラ・グハ
Ramachandra GUHA
(インド／歴史学者・社会学者)



民衆の側に立った「環境史」の地平を切り開き、また、多様性を抱える大国インドの複雑な歴史を丁寧に辿り民主主義の実像を描いた著書でも知られる、インドを代表する歴史家。

芸術・文化賞

ミン・ハン
Minh Hanh
(ベトナム／ファッションデザイナー)



ベトナム固有の少数民族の刺繍や織物を融合させた現代的なデザインを創造し、若手育成や市場開拓に取り組みながら、ファッション文化の発展に貢献するデザイナー。

第27回

2016

大賞

A.R.ラフマーン
A. R. RAHMAN
(インド／作曲家・作詞家・歌手)



民族性豊かな南アジアの伝統音楽と西洋のクラシック音楽、現代の大衆音楽を大胆に融合させた個性的な楽曲で、映画音楽の新境地を開拓する世界的に有名なインドの国民的アーティスト。

学術研究賞

アンベス・R・オカンポ
Ambeth R. OCAMPO
(フィリピン／歴史学者)



著書やメディアを通じた発言等を通じて、フィリピンの歴史をわかりやすく伝え、市民の国際感覚の育成に寄与するなど、フィリピンの学術・文化・社会の発展に大きく貢献している歴史学者。

芸術・文化賞

ヤスミン・ラリ
Yasmeen LARI
(パキスタン／建築家・建築史家・人道支援活動家)



数多くの歴史的建造物の保存修復活動や、地震や水害等の災害に対して低コストで環境にやさしいシェルターの提供を行うなど人道支援活動にも尽力した、パキスタン初の女性建築家。

第28回

2017

大賞

パースック・ボンパイチャットおよびクリス・ベーカー
Pasuk PHONGPAICHT & Chris BAKER
(タイ／経済学者)&(英国／歴史学者)



タイ社会が直面する問題を政治と経済、社会と文化など多面的に分析した共同研究は傑出しており、多大な社会貢献をしてきたタイの代表的知識人。

学術研究賞

王 名
WANG Ming
(中国／行政学者、NGO・市民社会研究者)



中国で初めてNGO研究センターを立ち上げ、中国のNGO研究の水準を飛躍的に高めた、NGO研究、環境ガバナンスの第一人者。

芸術・文化賞

コン・ナイ
KONG Nay
(カンボジア／吟遊詩人、チャバイ・マスター)



内戦とボル・ポト時代の弾圧を奇跡的に生き延び、現在も演奏・作曲・後継者育成等の活動を精力的に続けることで、伝統的語り物音楽・チャバイの弾き語りを現代に伝える、カンボジアの伝説的吟遊詩人。

第29回

2018

大賞

賈樟柯
JIA Zhangke
(中国／映画監督)



21世紀の中国を代表する映画監督。急激に経済発展する社会的歪みの中で、苦悩しながらもたたかに生きる若い人々を等身大に描いた作品は、世界的に高く評価されている。

学術研究賞

末廣 昭
SUEHIRO Akira
(日本／経済学者、地域研究者(タイ))



タイ経済研究を基盤として、アジア全体の工業化や経済実態を解明し、日本のアジア研究の発展に主導的な役割を果たすなど、日本におけるアジア経済研究の第一人者。

芸術・文化賞

ティージャン・バーイー
Teejan Bai
(インド／パングワニー奏者)



古代インドの叙事詩『マハーバーラタ』に基づく歌謡りのパングワニーの第一人者。先住民であり女性であることで二重にインド社会から差別される中で歌い続け、人々に勇気を与えている。

第30回

2019

大賞

ランドルフ・ダビッド
Randolf DAVID
(フィリピン／社会学者)



社会学者としての知見を大学、テレビ、新聞等を通じて広く市民と共有。フィリピンにおける社会的正義のために活動し、アジアの学術・文化の交流推進と相互理解の深化にも尽力した「行動する知識人」。

学術研究賞

レオナルド・ブリュッセイ
Leonard BLUSSE
(オランダ／歴史学者(東南アジア史専門家))



広汎な時空間を対象とする近世東アジア／東南アジア海域史を開拓し、学際的なアプローチに基づく歴史学を確立した歴史学者。その学問は、理想的な形のグローバル・ヒストリーとして評価されている。

芸術・文化賞

佐藤 信
SATO Makoto
(日本／劇作家、演出家)



現代的感觉と伝統的美意識を融合させた優れた舞台を数多く制作し、国内外で高く評価されている劇作家、演出家。公共劇場の芸術監督としての活動やアジアの演劇人育成にも熱心に取り組んでいる。

第31回

2021

大賞

パラグミ・サイナート
PALAGUMMI Sainath
(インド／ジャーナリスト)



グローバリゼーションに揺れるインドで、貧しい農村を訪ね、農民の声を聴き、「農民の物語」を伝える気骨のジャーナリスト。激動のアジアで、新たな「知」と市民的連帯を追求する。

学術研究賞

岸本 美緒
KISHIMOTO Mio
(日本／歴史学者)



中国明清期の社会経済史を専門とする歴史学者。日本における東洋史学の正統な継承者として、中国社会への内在的な視線とグローバルな視野で、常に斬新かつ問題提起的な研究を行う。

芸術・文化賞

プラープダー・ユン
Prabda YOON
(タイ／作家、映画作家、アーティスト)



タイを代表する作家の一人であり、評論家、脚本家等としても活躍するマルチクリエイター。タイ文学・思想の発展に寄与し、タイにおける日本理解の更新にも貢献する。

第32回

2022

大賞

林 英哲
HAYASHI Eitetsu
(日本／太鼓奏者)



創作太鼓音楽の最先端を走り続けてきた、世界的に活躍する太鼓奏者。伝統に根ざした太鼓文化を基盤としつつ、身体所作の力強さと美しさを伴う新しい舞台芸術として、太鼓の表現を飛躍的に発展させた。

学術研究賞

タイモン・スクリーチ
Timon SCREECH
(英国／美術史家)



江戸を主たるフィールドとし、広くビジュアル情報として残された歴史を解明し続ける美術史家。多元的かつグローバルな視点と斬新な方法論によって江戸研究の新たな地平を切り開いている。

芸術・文化賞

シャジア・シカンダー
Shahzia SIKANDER
(米国／アーティスト)



南アジアを代表するアーティスト。伝統的な細密画の世界に、最新のデジタル技術を駆使して伝統絵画を今を生きる魅力的な造形として蘇らせ、新たな芸術表現を開き続けている。

第33回

2023

大賞

トンチャイ・ウィニツチャクン
Thongchai WINICHAKUL
(タイ／歴史学者)



民主主義と市民社会の発展に貢献し、知識人の範となる歴史学者。地図の作成とその利用方法に着目した研究で、世界の人文・社会科学に大きな影響を与えた。

学術研究賞

カタリーヤ・ウム
Khatharya UM
(米国／政治学者、東南アジア研究者)



移民や難民の苦境に光を当て、現代世界の課題に挑む政治学者。祖国カンボジアの悲劇の歴史を掘り下げた分析で、グローバル研究の新領域を開拓している。

芸術・文化賞

張 律(チャン・リュル)
ZHANG Lu
(中国／映画監督)



国籍・国境を越えた比類なき「東アジア映画」を製作し続ける映画監督。異文化の融和や共生のビジョンを表現した作品で、世界的に高く評価されている。

第34回

2024

大賞

真鍋 大度
MANABE Daito
(日本／アーティスト、プログラマー、DJ)



先進のメディアテクノロジーを創作の起点とし、身体表現と科学技術をシンクロさせ、従来の枠にとられない形式で表現へと展開するアーティスト。

学術研究賞

スニール・アムリス
Sunil AMRITH
(米国／歴史学者)



ベンガル湾周辺の南・東南アジア地域を対象に、環境や移民等複合的な視点で、国民国家の枠を超える歴史研究を実践している。

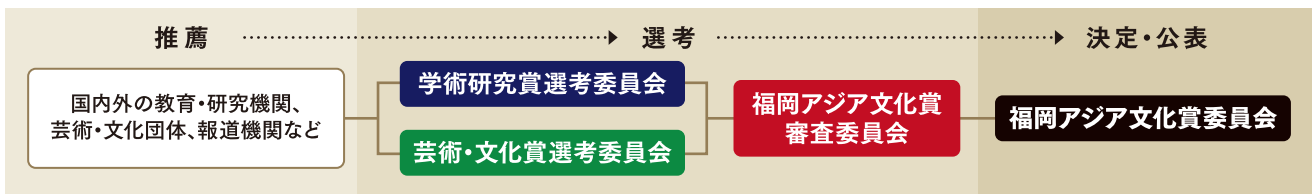
芸術・文化賞

キムスージャ
Kimsooja
(韓国／アーティスト)



韓国の伝統的な風呂敷包みであるボックリを使う作品や、光の性質を利用したインスタレーションを手がけ、アジア文化を起点に国際的な存在感を放つアーティスト。

福岡市と(公財)福岡よかトピア国際交流財団が主催し、学会、経済界、文化団体等の協力により運営しています。



福岡アジア文化賞委員会委員

特別顧問	岡野 結城子	外務省国際文化交流審議官	〃	倉富 純男	西日本鉄道株式会社代表取締役会長
〃	都倉 俊一	文化庁長官	〃	柴戸 隆成	株式会社福岡銀行取締役会長
〃	服部 誠太郎	福岡県知事	〃	下川 祥二	福岡市教育委員会教育長
名誉会長	高島 宗一郎	福岡市長	〃	早田 敦	九州電力株式会社代表取締役副社長執行役員
会長	谷川 浩道	(公財)福岡よかトピア国際交流財団理事長	〃	高添 博之	毎日新聞社西部本社代表
副会長	石橋 達朗	九州大学総長	〃	田川 大介	株式会社西日本新聞社代表取締役社長
〃	平畑 雅博	福岡市議会議長	〃	中川 博行	朝日新聞社西部本社代表
〃	中村 英一	福岡市副市長	〃	永田 潔文	福岡大学学長
監事	小林 登茂子	福岡市会計管理者	〃	日向 弘基	九州運輸局長
〃	清生 美保	福岡市社会福祉協議会常務理事	〃	樋口 大山	日本放送協会福岡放送局長
委員	青柳 俊彦	九州旅客鉄道株式会社取締役会長	〃	藤井 一郎	株式会社クラフティア取締役会長
〃	池松 裕子	日本赤十字九州国際看護大学学長	〃	星野 光明	九州経済産業局長
〃	今井 俊之	日本経済新聞社専務執行役員西部支社代表	〃	堀内 徹夫	福岡市議会総務財政委員会委員長
〃	今井 尚生	西南学院大学学長	〃	増田 雅己	読売新聞西部本社代表取締役社長
〃	上田 哲子	福岡県副知事	〃	道永 幸典	西部ガスホールディングス株式会社代表取締役会長
〃	尾花 康広	福岡市議会副議長	〃	見野 由美子	特定非営利活動法人福岡市レクリエーション協会理事
〃	北島 己佐吉	九州産業大学学長	〃	安永 幸一	福岡文化連盟副理事長
〃	久保田 勇夫	株式会社西日本シティ銀行特別顧問			

委員は五十音順、敬称略

福岡アジア文化賞 審査・選考委員

福岡アジア文化賞審査委員会

委員長／石橋 達朗

九州大学総長
福岡アジア文化賞委員会副会長

副委員長／中村 英一

福岡市副市長
福岡アジア文化賞委員会副会長

委員／石坂 健治

日本映画大学教授
東京国際映画祭シニア・プログラマー
芸術・文化賞選考委員会委員長

委員／内野 儀

学習院女子大学国際文化交流学部教授
東京大学名誉教授
芸術・文化賞選考委員会副委員長

委員／河野 俊行

九州大学名誉教授・特任研究員
学術研究賞選考委員会副委員長

委員／川原 正孝

株式会社ふくや代表取締役会長

委員／下山 雅也

国際交流基金理事

委員／竹中 千春

立教大学法学部元教授
学術研究賞選考委員会委員長

学術研究賞選考委員会

委員長／竹中 千春

立教大学法学部元教授
福岡アジア文化賞審査委員会委員

副委員長／河野 俊行

九州大学名誉教授・特任研究員
福岡アジア文化賞審査委員会委員

委員／木宮 正史

東京大学大学院総合文化研究科教授

委員／清水 一史

九州大学大学院経済学研究院教授

委員／清水 展

京都大学名誉教授
京都大学東南アジア地域研究研究所連携教授

委員／高原 明生

東京女子大学特別客員教授

委員／田村 慶子

北九州市立大学名誉教授・特別研究員
NPO法人国境地域研究センター理事長

委員／脇村 孝平

大阪経済法科大学客員教授

芸術・文化賞選考委員会

委員長／石坂 健治

日本映画大学教授
東京国際映画祭シニア・プログラマー
福岡アジア文化賞審査委員会委員

副委員長／内野 儀

学習院女子大学国際文化交流学部教授
東京大学名誉教授
福岡アジア文化賞審査委員会委員

委員／宇戸 清治

東京外国語大学名誉教授

委員／小川 忠

跡見学園女子大学文学部人文文学科教授

委員／片岡 真実

森美術館館長
国立アトリサーチセンター センター長

委員／寺内 直子

神戸大学大学院国際文化学研究所教授

委員／西村 幸夫

國學院大學観光まちづくり学部長

委員／松隈 浩之

九州大学大学院芸術工学研究院准教授

委員、肩書きは第35回の選考時点／委員は五十音順、敬称略